

五月のテニスボール

・

栗本慎一郎

六興出版

五月のテニスボール

蘇工業学院図書館
藏书章

・ 栗本慎一郎

六興出版

著者略歴

栗本慎一郎（くりもと・しんいちろう）

1941年、東京生まれ。慶応義塾大学経済学部卒、同大学院博士課程修了。現在明治大学法学部教授。専攻は経済人類学。『経済人類学』『パンツをはいたサル』『パンツを捨てるサル』『幻想としての経済』『光の都市・闇の都市』『ブダベスト物語』『南部＝地鳴りするアメリカ!』『意味と生命』など著書多数。

五月のテニスボール

平成2年10月10日 初版印刷
平成2年10月16日 初版発行

著者 栗本慎一郎

発行者 賀来壽一

発行所 株式会社六興出版

東京都文京区水道二―九―二
郵便番号 一一二

電話 03(943)3431

振替 東京 1192448

印刷 製本 中央精版印刷株式会社

©1990 Shinichirō Kurimoto

落丁・乱丁の節はお取り替え致します。

ISBN4-8453-7175-8 C0095

五月の
テニスボール

目次

青空の矢

雨 9

神 14

フロリダ 17

水 19

ブダの丘 21

宙に浮く寢床

東京 29

男 31

色 33

旅 35

音楽 37

朝 39

アメリカ 41

酒 43

テレビ 45

パーティー 48

ホテル 50

手紙 53

昆虫 55

ネクタイ 57

香り 59

ファッショ
ン 61

2001年 64

夏 68

寝床 70

都市のフィールド・ワーク 73

東京ブラック・ツアー 76

トランシルバニア・ドラキュラ・ストリート 87

ブダペスト・シテイマップ 104

アンデス、コカの葉畑 106

ビデオ空間、苗場 116

ムーンフェイズ・ニューヨーク 127

男と女

電話 135

切り口上 139

活性化 143

時間 150

好み 157

甘え 163

意識 169

離婚 176

運転する女 137

約束 141

嘘 147

討論 153

いい女 160

クルマ 166

感性 173

マドンナ 179

風が吹くとき

おふくろの話 185

猫 188

雪の中の正月
193

自殺志願者
198

ベイルート
204

飲むでもなし
212

路地と森
195

酒と涙
201

魔女と天才
207

五月のテニスボール
218

あとがき
224

初出誌紙一覧
228

装 装
幀 画

荒
田
秀
也

青空の矢

雨

物凄い雨だった。

一本しかない弱々しいワイパーは、天から流れ落ちてくる洪水のような雨に抗して必死に頑張っていたが、未熟なドライバーにとっては前はほとんど見えないにひとしかった。

「怖いからって、そんなに左に寄らないでよ」

助手席に座っていた後輩が言った。悲鳴を上げたようなものだった。

横浜に向かう道はセンターラインさえも雨に煙っていた。

恐ろしいスピードで通り過ぎる対向車のヘッドライトに押されて、いつのまにか車体の低いスバル三六〇は道の左へ左へと寄っていつてしまう。路肩の水溜まりが、ばしゃと水を跳ね返し、電信柱をほとんどこすったかにさえ見えた時、後輩が哀願したのだった。

狭いリアシートには、やはり後輩の女子学生が水に濡れたまま座っていたが、彼女はなにとも言わなかった。

横須賀からのデモの帰りだった。

みんな警官たちにひどく殴られて、疲れていた。

体は、水に濡れていた。心も、濡れていた。

私の一九六一年型スバルは、行きにビラやヘルメットなどを積んでいったのだ。

いま思い起こせば、私が左翼だったことがあつたなんてとても信じられない。でも私は、そのときは真面目だったのだ。

横須賀のデモが終わったあと、雨が激しくふりはじめた。スバルのヘッドライトは暗く小さく、豪雨のなかではないも同然だった。

そして、ついに左に寄り過ぎたとき、後輩がそう言ったのだった。

私は道の真ん中を走ろうとした。でも、よく見えないからとても疲れる。車の進路はどうしてもふらふらしてくる。私には、びしょぬれの後輩が不安がつているのがよく分かったが、どうしようもない。

横浜に入って電車の駅が見えたとき、彼は、「僕はここで失礼します」と言つて降りてしまった。

女子学生は、降りていかなかった。

三人は、本当は東京まで戻ることになっていたのだった。

彼は学生運動をやっている中でも、色白の知性派で、弁の立つ男だった。私も得意ではなかったが、彼は特に暴力的な場面が苦手なようだった。

私はその後もまだ運動に残っていたが、彼はこの日、横浜で車を降りたまま運動からも降りていった。その日のデモは、特にきつかったのだ。

二四年後、私は、大新聞社に勤めている彼に銀座のクラブで声を掛けられたがまったくわからなかった。

「わからないの？」と、例の女言葉で彼は抗議したが、わかるわけではない。彼は去っていったのだから。

彼が降りていったあと、運動に疲れた私は残った彼女と本牧あたりの汚れた汚れたバーで一息ついた。

彼女は小柄で、やはり色が白かった。私より古くから運動に参加していたベテランで一年前まではとても熱心な人として知られていたが、このところ時々、顔を出さないこともあった。何かを考え始めると、そういうことはベテランの活動家にしてもよくあることだった。

私は、デモと運転に疲れて、バーのカウンターで睡魔に襲われかけた。ピートルズがかかっ

ていた。

その私の耳に、不思議な声が聞こえてきた。

「ねえ、私が娼婦だったら買ってくれる？」

天からの声ではなかった。彼女の声だった。

意味が、わからなかった。私は、横に座っている彼女のあどけなくさえ見える顔をぼんやりと見詰めた。

私は、彼女のことを好きだった。

すごく好きだったかどうかは分からない。何しろ、私は、その日の横須賀のデモで、自分の学校ではなくお茶の水女子大の隊列のなかに特に気に入った女を見出していたのだ。今の妻である。

え、なんだって？ 私はただ頭が混乱し、一生懸命何か言おうとしたが、結局、ただ黙っていただけだ。

そのバーを出て、彼女も去っていった。

彼女と私は、再会していないが、私が妻と別れるの別れないの騒ぎを起こしたのは、十数年後、あるバーで小柄で色白な可愛い娘に出会って夢中になったせいだったが、その彼女はこ

の横浜で去っていった女子学生の面影を持っていた。

私は、横浜を通るたびに、彼女を想い出す。どこで暮らしているんだろう。ずっと愛してるよと思う。

神

私は、長いこと奈良に住んでいた。大和郡山のそのまた辺地に、アメリカの大学の友人から「自分が見たなかで人間の住む最も小さい家」などと言われた県営住宅に住んでいたこともある。

そこで私は、いつも奈良の山々を見ていた。そして、日本人にとって神とは何かをずっと考えていた。神の山たる三輪山や春日山はいつも私の目の前にあったのだ。

ご神体たる山をいつも眺め、しばしばその山中を歩いた。いまと違って暇で暇で、山のうっそうとした樹々や、歩いていると思いがけないところに現われる小さな池のおいを嗅いで歩く時間がいくらかもあった。

「思索」というのは、時間を要する。あの頃は時間をかけて考えることができた。大学時代の知人が、東京のマイナー知識人用メディアでいろいろ活躍しているのは、まったく気にもならなかった。私は、神であるところの奈良の山々から何かをさずかっていると自覚していた。